

書 評

Lewis R. Rambo, Charles E. Farhadian (Eds.)
The Oxford Handbook of Religious Conversion

才 藤 千津子

同志社女子大学
現代社会学部・社会システム学科
教授Review of Lewis R. Rambo, Charles E. Farhadian (Eds.)
The Oxford Handbook of Religious Conversion

Chizuko Saito

Department of Social System Studies, Faculty of Contemporary Social Studies,
Doshisha Women's College of Liberal Arts,
Professor

このハンドブックが取り扱っている「宗教的回心^{註1} (religious conversion)」とは、一般的には人がある信仰をもつに至った出来事や体験のことを指すが、すでに信仰を持っている人が改宗するか宗派を変更するなどという体験も含まれる。近年では、より広い意味で、人の霊的レベルでの変容 (transformation) を含んだ複雑な宗教的人格的变化の体験を意味する言葉としても使われている。

歴史的に見ると、宗教的回心は「宗教心理学」のなかの重要なテーマのひとつであった。宗教心理学とは、主に心理学の理論と方法を使って人間生活における宗教の性質と機能を説明、理解しようとする学問である。20世紀初頭のアメリカでは心理学者ヴェントや精神分析の創始者フロイトの影響のもと宗教心理学が発展し、ジェームズ『宗教的経験の諸相』(1902) やスターバックス『宗教心理学』(1899) など宗教心理学の古典が出版された。当時、宗教心理学研究において最もよく研究されたテーマのひとつが、プロテスタント・キリスト者の宗教的回心についての研究である。しかし回心研究はその後いったん沈滞した後、20世紀後半、社会学者による新宗教への改宗者の研究によって再び盛んになった。その後、人類学者によるさまざまな文化・宗教における回心の研究、ひいては神経心理学者による脳神経と回心経験の関係の研究など、今日の回心研究はさまざまな学問分野に広がっている。

この本の目的は、このような現状を鑑み、さまざまな分

野の研究者たちによる学際的かつ多宗教的なアプローチによって今日までの回心研究を批判的にレビューし、将来の回心研究に新しいビジョンを示そうとすることである。この本の最大の功績は、宗教的回心の研究をグローバルかつ世界史的な視点から概観したことであり、そのような困難な仕事を成し遂げ得たハンドブックは今までこの分野において他に見当たらない。その意味で、この一冊は今後宗教的回心の分野における重要なテキストのひとつになると思われる。

この本の編者の一人であるルイス・ランボウ (Lewis R. Rambo) は、長年この分野を研究してきた回心研究の第一人者である。アメリカ・カリフォルニア州バークレーの神学大学院の教授であり、韓国・ソウルの延世大学、中国・上海の復旦大学の客員教授としての経験から東アジアの宗教界の現状にも詳しい。またもう一人の編者チャールズ・ファーディアン (Charles E. Farhadian) は、同じくカリフォルニア州サンタバーバラの大学の宗教学とキリスト教学の教授である。

この本全体は大きく第1部と第2部から成っており、第1部は、歴史学、地理学、人類学、社会学、心理学、ジェンダー学、芸術、政治学などの分野で、それぞれ回心や宗教的変容がどう理解されてきたかということを取扱っている。第2部は、ヒンズー教、ジャイナ教、仏教、シク教、道教、儒教、ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教、新宗教など

世界の主な宗教が回心をどうとらえているか、回心の政治的意味ということも含めて分析している。それぞれの章の内容の3分の2はその分野の先行研究のレビューであり、残りの3分の1で各著者の考えが述べられている。

回心 (conversion) ということばの問題

回心研究における重要なテーマのひとつは、「回心 (conversion)」という言葉そのものもつ問題である。回心の定義は主なものだけでも数十あるとも言われるが、言葉のもともとの意味は「方向転換」である。その意味で回心とは、宗教的人格 (あるいは信念や態度) に起こる何らかの「転換、変化 (change)」、別の言葉で言えば「人格変容 (transformation)」の体験である。

新約聖書の中のパウロ (サウロ) の回心^{註2}の記述は、20世紀西欧で発展した宗教心理学における (主にプロテスタント・キリスト教の) 回心体験の理解に決定的な影響を与えた。西欧での回心研究の初期には、しばしばパウロの回心体験が回心の典型的なモデルとされたのである。当時は、回心を人格変容が起こる比較的短期間の個人的「体験」「イベント」としてとらえ、体験者の心理的・生理的要因に焦点を当てる研究が主流であった。しかし近年では、パウロのように一回限りで人生や人格が変わるような回心体験、宗教体験をする人は現実にはほとんどいないと言われている。人は自分がそれまでもっていた考え方やパラダイム、アイデンティティを簡単に手放すことはなく、本人がどこまで自覚的であるかは別として、何度も精神的な死と再生の体験を繰り返しながら自らの宗教的アイデンティティを模索して生きる。回心は、長期間 (しばしば一生) 続くゆるやかな「プロセス」であると考えたほうが現実的であり、パウロの唐突でダイナミックな回心体験を回心の原型と見てきたキリスト教の伝統は、回心を狭く解釈しすぎたといえるだろう。今日の回心研究では、人が特定のコンテキストにおいて新しい宗教的アイデンティティを獲得してゆく (あるいはアイデンティティを変容させてゆく) プロセスに強調点が置かれるようになった。

回心研究の課題

回心研究の研究史を反映したこのハンドブックでは、今までの回心研究の枠組みの狭さを広げようという試みがなされている。この点について、2015年11月にアメリカ・アトランタで開催された AAR (American Academy of

Religion、アメリカ宗教学会) の年次大会の「回心」セッションのなかでこのハンドブックについて議論されたこと (筆者は聴衆のひとりとしてそのセッションに参加した) を紹介しながら、このハンドブックの課題、ひいては回心研究の課題を考察したい。

まず指摘したいのは、この本によって、回心について、キリスト教以外の宗教の複雑で多様な回心体験をより深く考察する必要性が改めて確認されたことである。そもそも回心は、人によってまた状況によってさまざまに複雑な様相を呈する体験であり、普遍的・抽象的な出来事としては語り尽くされない。加えて近年の回心研究では、回心体験が起こる文化的・社会的・宗教的コンテキストの重要性が強調される傾向があり、回心を理解するためには、心理的なもの以外にも社会的な要因や宗教的要因など様々な要因を考慮しなければならないと言われている (例えば、ランボー、2004年)。AARのセッションでは、今もなお伝統的カースト制度が根深く残るインドにおいて、ダリット (不可触民) とされるヒンズー教徒がキリスト教に回心・改宗するということは、単なる信仰や宗教の変化を意味するだけではなく、大きな政治的・社会的意味合いと変化を伴うことが指摘された。その意味では、このハンドブックのタイトルにある「回心」という言葉は、単数形で「conversion」と書かれるべきではなく、複数形で「conversions」とされるべきなのかもしれない。

そもそも、宗教におけるさまざまな変容の体験について、「回心」という言葉を使うのが本当に適切なのだろうか。回心という言葉からは、ひとつの立場からそれまでなかった別の新しい立場へと転ずるというイメージがわく。しかしたとえば、中国文化の伝統のひとつ、道教への回心は、このような意味での「回心」とは見なされず、むしろ人があるべき「本来のあり方に戻った」だけだとも考えられるのである。

また、プロテスタント・キリスト教のように強い個人主義的な宗教アイデンティティを持たない文化、たとえば伝統的なアジア文化において、西欧で発展し、その根底にはキリスト教を中心とした一神教の人間観がある「回心」という考え方を使得彼らの宗教への関わり方を説明することは可能なのか、また適切なのかという疑問も残る。たとえば、多くの日本人にとって、自分がときに神道の実践者であり、またときに仏教の実践者でもあり、かつ自覚的には「無宗教」を標榜するということが自己矛盾ではない。新年には神社に初詣に行き、葬儀は仏教式で行うが、何かを「信じる」ことや特定の教団にコミットするこ

とには抵抗があるというのが大方の日本人の宗教への関わり方である。ひとりの人間にいくつもの宗教へのゆるやかな関わりが矛盾なく同時に併存するこのような宗教性を、どのように説明したら良いのだろうか。またそのような文化の中で育った人が排他的関わりを要求する宗教、たとえばキリスト教に改宗するとき、その人に何が起こるのだろうか。AARのセッションのなかでは、このような場合、回心ではなく「religious “fluidity” (宗教的流動性)」という視点から説明するほうがよいのではないかと主張した人がいたが、今後この点はこの分野における重要な議論のひとつになってゆくだろう。また、比較神学の立場からは、人が新しい宗教に出会うということは、究極的には「宗教間の出会いと変容 (interreligious encounter and transformation)」だという意見も出された。

最初に述べたように、このハンドブックの最大の功績は、今日までの回心研究を批判的に概観し、その問題点も含めて提示したことである。この本は、20世紀から21世紀初頭までの宗教的回心の研究成果をまとめた基本的文献のひとつとなるだろう。しかし同時に、この本によって、これまでの回心研究の偏向と限界、新しい回心理解の必要性も明らかになったといえる。グローバリゼーションが進むなか、私たちすべてが、従来自分たちがなじんできた宗教ではない新しい宗教に出会う可能性を持つ時代を迎えている。回心研究は今後もその視野を広げながら、人間の人格的宗教的変容を研究する分野として宗教研究に貢献してゆくであろう。

注

注1 「回心」という日本語は「かいしん」または「えしん」と読む。「えしん」とは仏教用語で、誤った心を改めて仏道に帰依することである。「かいしん」と読む場合には、本論の場合のように英語の「conversion」の訳であり、主にキリスト教の文脈のもとで、罪人の状態、あるいは不信・迷信の状態から(神への)真の信仰に転ずることをいう。宗教心理学では、回心ということばは通常、後者「かいしん」の意味と読みとで用いられる。

注2 キリスト教を地中海一帯に広めてキリスト教の基礎を作ったとされる使徒パウロは、タルソ(現在のトルコ南東)でベニヤミン族のイスラエル人として生まれ

た。本名をサウロといい、若い頃は熱心なユダヤ教徒としてキリスト教徒を迫害していた。しかしキリスト信者たちを逮捕するためにシリアのダマスコへ向かう途上で突然天からの光を受け、「なぜ、わたしを迫害するのか」というキリストの声を受けて回心した(新約聖書「使徒言行録」9:1-19)とされている。この有名な聖書箇所は、しばしば「サウロの回心」のエピソードと呼ばれる。

参考文献

- Lewis R. Rambo, Charles E. Farhadian (Eds.). (2014). *The Oxford Handbook of Religious Conversion*. New York: Oxford University Press
- 金児曉嗣監修、松島公望・河野由美・杉山幸子・西脇良編『宗教心理学概論』2011年、ナカニシヤ出版
- ウイリアム・ジェイムズ著、舛田啓三郎訳『宗教的経験の諸相上・下』1969年、岩波書店
- ルイス・R・ランボー著、渡辺学・高橋原・堀雅彦共訳『宗教的回心の研究』2004年、ビイング・ネット・プレス

(この書評は、2015年度同志社女子大学研究助成金「現代日本におけるキリスト教牧会のモデル構築に向けて一回心とパストラルケア」を受けた研究の一環として書かれたものである。)

